



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.196
2020.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

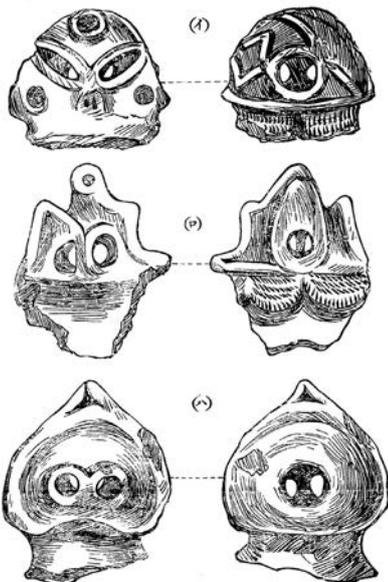
— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第31回 ● 貝塚土器把手形状の起源変遷

沼田頼輔の「把手の分類」は、祖型的と思われる単純な形態を始点とし、そこから変化を順序付ける法則を導出して形式内集房化を図る二者(東北北部の「瓶ヶ岡式」突起(実例省略)及び関東を中心とする「大森式」突起)の分類、更に複雑な装飾を始点とし、順次簡素化の変化を辿る形式内集房化と形式変遷の二者(「沼部式」把手→「御所見式」把手)の分類があり、加曾利B式との関連において解説したが、愈々第37図に示す縄紋式中期の立体的な「都式」把手が最後の分類となる。加曾利B式との直接的な関係はないと考えられがちであるが、学史にとっては特筆すべき重要なテーマである。即ち、八木柴三郎・下村三四吉が阿玉台貝塚報告(明治27年4月)で陸平貝塚報告を復活させた「相異の土器区分論」(大森式→陸平式)に対し、型式学的に逆転する順序関係(陸平式→大森式)の導出が学史として再確認すべき事柄である。

戦後に記載された学史はモースの弟子達



▲第37図 沼田頼輔の「都式」把手(一部省略)

が陸平貝塚で仮設した新古の「土器区分」(大森式→陸平式)のみが吹聴され、それ以外の議論は不問に付すばかりである。このような狭隘な学史記載が日本考古学の発達史を矮小化し結果として歪曲されるが、加曾利B式研究の学徒であればこそ、正にその渦中において形態学から逆転する順序が議論されている事実を理解し、改めて事実に基づく学史を再構成しなければならない。そこで大正時代の層位学による年代の新古と検証するならば、把手の形態学からも同じ新古の結論に到達している先行事例として注目したい。

さて、沼田頼輔の「都式」把手は「把手製造の変遷を知るべき好材料」とされ、「此の形式に属する把手の特徴とする所は裏面に一個の孔と表面に二個の孔とを有せること」に収束させた上で、「最初は」第37図「イ」に示したるか如き人面に模したるものにして耳目鼻共に明かに認むることを得べしといへども次第に其の製造を省きして益実物と遠かり遂に其の形状の何物に模したるやを知るべからざるに至れり」(ゴチック体は引用者)との明快な形態学的展望が秀逸である。形式を制定し、その内なる変化には始点として原型を特定し、その間で痕跡の遠近形態を追跡する形態学を実践しており、流石にモンテリウスのルジメントも顔負けであろう。

「都式」の由来となる第37図「イ」は、沼田頼輔以前にもその重要性が認識されており、再び坪井正五郎の西ヶ原貝塚報告の登場となる。『東京人類学雑誌』第8巻第85号(明治26年4月)は、坪井正五郎の「西ヶ原貝塚探求報告。其一。」の次に俊才・山崎直方の「下総貝塚遺物図解(図入)」が、その前月に千葉貝塚を報告した続きとして掲載され、第37図「イ」と同一把手と判断される図「第二十一」が印象深い。ここで山崎直方は「第二十一は土器の耳にして其人面を象りたるは明

かなる事にして土偶よりも退化したる形なり耳目鼻口の位置畸形をなすは今退化の途中にあるものなり西ヶ原貝塚、其他の貝塚より之より一層退化したる形の土器破片を得たり不日坪井君の西ヶ原貝塚報告中其図を掲げらるること信ず」(ゴチック体は引用者)と放ち、人面付把手の退化方向について千葉貝塚(勝坂式)→西ヶ原貝塚(堀之内2式)と仮設する興味深い形態学を導出する。

これに対し、早速翌5月の第86号で坪井正五郎は「西ヶ原貝塚探求報告。其二」の「巾着形の把手」の項において「此把手に付いては形状変化上甚面白い事がござります。山崎直方氏は既に本誌第八十五号二七四において(中略)と前触れを仕て置かれました。私は近々の中に「貝塚土器把手形状の起源変遷」と題する考説を草する積りでござります」(ゴチック体は引用者)と、山崎直方の「退化したる形」を巡り、負けじとばかりのドラマティックな論文名を予告として掲げる。

果たして論文「貝塚土器把手形状の起源変遷」は上梓されたであろうか? 実態は不明であり、恐らく本連載第19回で議論した「コロボックル風俗考 第九回」の挿図にその意味が込められ、「配置関係こそが意味深長」となる。詳細は省略に従うが、畢竟、坪井正五郎は「巾着形」突起については阿玉台貝塚の「巾着形」把手から西ヶ原貝塚の第22図への系列変化を辿る一方で、実は別な系列として鶴ノ木遺跡採集の中期の粘土紐による渦巻き文把手から下沼部遺跡の第23図への変化も想定可能とする等、類似順次関係において相異が甚だしい場合には言葉尻のみの概念によるアバウトな直線変化に帰着させる短絡性に対しては極めて懐疑的である。確証の無い議論には決して与せず、という中立性を保つ坪井正五郎の信念はコロボックル論争以来不変である。

※巻頭連載は隔月です。次回は 大村裕 さんです。

目次

■加曾利B式土器 貝塚土器把手形状の起源変遷(第31回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第24回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第189回) 林 弘幸 …3
■考古学者の書棚 『風の男 白洲次郎』 深江英憲 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第24回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

6. 吉備真備の祖母骨蔵器(和銅元年・圀勝・圀依母夫人の墓誌銘を刻む)・「それでは何だ?はまだまだあった」(1)

長いタイトルで申し訳ないのだが、実はこの中にも、「それでは何だ」が二つもあった。

岡山県内に限らず、多少でもわが国の奈良時代頃の歴史に興味のある方なら、吉備真備はご存知のはず。先回の富比賣墓地買地券を見ていただいた方には、全く説明不用のことだが、真備の父親は間違いなく、岡山県真備町あたりの出身だったといえる。この骨壺が発見されたところは、富比賣墓地買地券が発見されたところから西に4kmばかり、小田川に向けて伸びていた高さ40mばかりの尾根先端であった。現在では小田郡矢掛町東三成だが、真備町との境界とも言える地である。

発見は買地券より、100年ばかりも昔の元禄12(1699)年、この時の伝えは2~3あるが、大きな甕の、中にあったか、上から被せていたかは伝承によって異なるが、ともかく骨蔵器は、大甕で外部を保護されていたようである。骨蔵器本体は短い柱状つまみ被蓋付丸底鑄造銅器で、その蓋に円形に細い突帯が3条回っていて、その間の二行に銘が円形に沿ってめぐる形に刻まれていた。

内圈「銘 下道圀勝弟圀依朝臣右二人母夫人之骨蔵器故知後人明不可移破」

外圈「以和銅元年歲次戊申十一月十七日己酉成」

江戸時代の発見とは言え、当時の学者にとっては、わが国の和銅元(708)年ころの歴史といえ、先ず『続日本紀』であろう。この中の記述には、現代の学者以上に精通しているはずで、この銘文が何を示しているかは、すぐ分かったであろう。この骨壺の主が吉備真備の祖母であることが。

『六国史』の一つ『続日本紀』は、『日本書紀』に続いて文武・元年(697)から桓武・延暦10年(791)の間を40巻としてまとめられたものだが、その中で33巻の光仁・宝龜6年(775)に吉備真備の死が伝えられている。そこに真備は「右衛士少尉下道朝臣国勝之子也」とあった。これによってこの骨蔵器は、真備の祖母の骨蔵器として知られることに成った。

しかしこの父圀勝のことも弟圀依のことも、この真備の墓伝に一行書かれていた以外、他の資料は一切なく、何も分かっていない。その母夫人も同様である。だが吉備真備を生むようなところだから、こうした当時としては最新の文化とも言える火葬や墓誌があっても不思議はないだろう、ということで現在までも、到っていたといえよう。

しかしこの真備祖母の骨蔵器が作られた時は、和銅元年(708)で、真備はまだ13か14の少年である。しかも生まれは大和の可能性が強い。当時の圀勝の身分も全く分からない。こうした中で誰が何処でこうした墓誌を刻んだ骨蔵器が作り得たのだろうか。

わが国では7世紀代になると仏教関係の文化は、各地に広がりを見せているが、古墳文化も継続しているときでもあって、火葬は、丁度700年死亡の僧道昭に始まるのが常識であった。また墓誌にしても、今に到るも正確な資料は16例に過ぎないということである。

今回最も参考としている本は、奈良国立文化財研究所飛鳥資

料館編の『日本古代の墓誌』(同朋社1979年8月)であるが、この年の1月に、『古事記』の編集者太安万侶の墓誌が発見されたこともあってか、飛鳥資料館での特別展として「日本古代の墓誌」展が開催された。その基本的資料紹介としてのこの本の編集であろう。同じ年の11月に太宰府の宮ノ本遺跡で墓地買地券も発見された。しかしその後、各地での奈良から平安期の墓地発見は多くなったが、明確に墓誌とか墓地買地券といえるものは発見されていないのである。

この様に数少ない資料は、一度詳しく検討され紹介され一定の評価が定まると、その後の研究は余り注目されないのが普通であろう。私たちにしても、岡山県下では最も著明な遺物の一つである、吉備真備祖母の骨蔵器にたいして、本気で注目してなかったことに、今頃になって反省していることは、遅すぎたことであった。

この骨蔵器の圀勝・圀依の「圀」字は今の若い人には馴染み無くとも、一応「くに」と分かる人が多いとしても、それは水戸光圀さんの名前のお陰かもしれない。江戸時代の学者には問題でない文字であっただろうが、その由来は知られていなかった様に思われる。寺名や梵鐘などに時に見られたこの字は、江戸時代には、どのように考えられていたのだろうか。もし光圀さんがその本来の由来を知ったら、どのような顔をしただろう??…(ちょっと笑いをこらえたくなる)・

妙な脱線はそこまで、明治以降の学者間では、吉備国のような田舎での火葬採用の速さと共に、墓誌も作りそこに「圀」字、則天文字を使用した、その早さに驚いたのである。しかし、ここでは、則天文字が『何だ』ではなく、現在の各地遺跡から出土例も知られてきた、則天文字を見た上での、吉備で採用された速さの問題でもあるのだ。またどの学者も問題としない「夫人」という現代人にとっては全く日常の言葉である女性の呼称にも問題であるのに気付いたのである。

中国唐時代の則天武后は、広辞苑にも載る人物で説明は不要だろうが、則天文字となると知る人も少ないだろう。私共も専門外のことであり、蔵中進『則天文字の研究』1995年 翰林書房の著述内容の敷き写しに過ぎないことは、お断りしなければならぬが、今回は先ず則天文字のことを、多少見てゆきたい。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部助手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。今回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 189

丸岡城跡 ～山形県鶴岡市

林 弘幸

私が紹介するのは、山形県指定史跡丸岡城跡である。

丸岡城跡は、戦国時代に庄内地方で活躍した大宝寺(武藤)氏の支城として機能したと考えられており、日本海に面する庄内平野南部から内陸の山形盆地・米沢盆地へと抜ける六十里越街道沿い(交通の要衝)に築かれている。江戸時代になると当地は徳川四天王の酒井忠次の子、忠勝が治める庄内藩領となる。そして、1632年から加藤忠廣(加藤清正の三男)が当地に屋敷を構える。「なぜ、肥後熊本の加藤家が?」と思う人もいるかもしれない。それは義父でもあった2代将軍徳川秀忠死後直後、3代将軍徳川家光から21もの嫌疑をかけられ改易となり、出羽庄内藩の酒井忠勝の元へ預けられたためである。これによって、肥後熊本藩54万石の藩主から、わずか1万石を辛うじて与えられた軟禁の身となる。ここから亡くなる(1653年)までの21年間、当地から離れることは許されなかった。

江戸時代が終わり明治を経て、大正になる。徐々に地元での関心が高まり、1913年には加藤忠廣遺跡保存会「誠道会」が発足する。そして、戦後まもない1949年に加藤清正の墓とされる五輪塔の発掘を地元住民で行う。これによって弓野焼の骨壺が出土し、清正の墓という見解が定着している(現在は否定的な意見も多数存在する)。1989年から学術的な発掘調査(第1次調査)が初めて行われ、2007年(第9次調査)まで継続的になされた。そして2008年から史跡整備が行われ、現在の姿となる。

整備によって本丸には、忠廣が住んだとされる御書院跡、庭園池跡、敷地内を巡る水路、道路、大手門跡などが礎石やキャプションで示されている。また史跡地内には、旧日向家住宅(市指定文化財)を移築復元させることで楽朋館というガイダンス施設が設けられている。隣接する天澤寺には依然として加藤清正の墓が鎮座しており、お参りする人が絶えることはない。



▲御書院跡遺構検出状況図(1/800・櫛引町教委2005より)

第1～9次調査の出土遺物だけでコンテナなど70箱あまりに分けて保管されている。それ以外にも過去出土遺物や表採遺物、不時発見遺物がある。

その多くが九州産の陶磁器であり、膨大な数が出土している。唐津焼、肥前焼、波佐見焼などが確認され、加藤忠廣が持ち込ん

だものあるいは日本海交易によって流通してきたものと考えられる。中には、東南アジア産と思しき陶器片が散見されることは特筆に値する。一方、大宝寺焼といった地元窯産の陶器は少なく、この顕著な偏りが丸岡城跡の特質といえよう。これら陶磁器は江戸時代でも前期のものが多く確認され、加藤忠廣の没年以後、丸岡城跡が城館や町屋として継続的に土地利用されていなかったことが伺える。在城がおよそ20年間という比較的時間幅が短く、元とはいえ大大名が使用していた優品揃いの種類豊富な資料であることから、学術的価値は非常に高い。それ以外にも、より古い時代のものが若干見受けられ、中世の珠洲焼片やこれまで知られていなかった古代の須恵器甕片が存在する。

私は、今年度、これら過去出土遺物の保管状態確認や過去整理作業の進捗把握という整理作業で丸岡城跡に関わらせていただいた。その成果や得た知見の多くは今のところ公表できないものの、遺物の活用・再評価を視野に入れた整理作業であるため、いずれ多くの研究の俎上に載るのではないかと考えている。関西から故郷庄内へ戻ってきたわずか一年の雇用の中での、それもわずかな期間のお仕事ではあったものの、このような故郷の重要遺跡に関われたことは宝である。3月までは修士論文で古墳時代のそれも人物埴輪ばかりに目を向けていた私ではあるが、それに匹敵するぐらい中～近世の陶磁・陶磁器への関心を抱ききっかけとなった。今後の私の考古学人生へ与えた影響は計り知れないほどに大きい。来年度は関西以西のこれまでより遠い地域に勤めるため、これら丸岡城跡出土遺物を自分の手で整理し、報告できないのが大変口惜しく思う。しかし、当出土資料をいずれ自分なりに評価できるようになお一層勉強していきたい。これをお読みになる皆さんが庄内に少しでも関心を持ち、注目していただくきっかけになれば幸いです。

主な参考文献:

- 庄内丸岡史編集委員会1998『庄内丸岡史』山形県東田川郡丸岡地区
- 福田正秀2019『加藤清正と忠廣 肥後加藤家改易の研究』星雲社
- 山形県櫛引町教育委員会2005『山形県指定史跡「丸岡城跡」試掘調査(第7次)概要報告書』
- 山形県鶴岡市教育委員会2007『山形県指定史跡「丸岡城跡」試掘調査(第9次)概要報告書』



▲大手門跡より城内と西方の金峰山を望む(2019年4月6日・筆者撮影)

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは村瀬 陸さんです。

考古学者の書棚

「風の男 白洲次郎」

青柳恵介著／新潮文庫(2000)

深江 英憲

恐らく子供の頃からそうだったかもしれないが、地面に落ちている土器片を拾い、地中にどんなものが埋まっているかについて思いを巡らすなど、所謂考古学につながる古い時代の歴史については、大いに興味を持ったものである。ところが、歴史の中でも、殊に近現代史については、興味が無い訳ではないし、嫌いな訳でもないのだが、あまり深く踏み込んでいかなかった。

私がこの著書に出会うきっかけとなったのは、平成20(2008)年の夏に携わったある遺跡の発掘調査だった。それは、兵庫県三田市西山1丁目に所在する大池ノ南遺跡の調査で、県営住宅の建替え工事に伴うものだった。調査地の一帯は、江戸時代、三田藩の武家屋敷だったところであり、今も残る屋敷町という町名もその由縁である。特に、調査の対象となった敷地は、藩主九鬼隆義に請われ、藩政改革に尽力した白洲退蔵の生誕地として知られていた〔『三田古地図』(三田市立三田小学校所蔵)からは、退蔵の祖父白洲貞四郎の屋敷地だったことが分かる。〕。そして、発掘調査を進めながら白洲退蔵について調べる中で、逆引き辞典を引くように辿り着いたのが、白洲次郎という人物だったのである。大袈裟に思われるだろうが、恥ずかしながらこういった経緯でこの人物のことを知ったのである。この様な出会いをすると、色々な事が連鎖的につながっていくものである。発掘調査現場の近くには、心月院という寺があった。聞くとところによると、ここには白洲家代々の墓と共に、白洲次郎・正子夫妻の墓があるというのだ。早速訪れてみると、翌年1月から3回に渡って「NHK ドラマスペシャル・白洲次郎」という番組が放送予定で、そこで次郎役を務める伊勢谷友介が、つい最近ここを来院されたとの紹介があった。こういったこともあって、私の中で白洲次郎という人物の存在がどんどん大きくなり、この後、白洲次郎自身の著書も含めて、白洲次郎の名を書店で見つければ、必ず買って読み、自室の書棚に並べていったのである。そんな訳で、私の書棚には何冊かの白洲次郎に関わる著書があるのだが、やはりその中でも最初買った本書を取り上げたいと思う。

白洲次郎は、第二次世界大戦敗戦後の日本の復興に尽力し、吉田茂首相の右腕として連合軍司令部(GHQ)との交渉にあたり、GHQをして「従順ならざる唯一の日本人」と言わせた事でも知られ、日本国憲法誕生の現場にも立ち会った人物である。

本書は、白洲次郎が亡くなった2年後の昭和62年4月に麻生和子(吉田茂の娘、麻生太郎の母)を始めとする次郎縁の政財界の著名人が発起人となり、未亡人白洲正子の推薦で国文学者の青柳恵介に取材執筆を依頼し、3年余りをかけてまとめたものである。著書の構成は、第1章～第6章及び終章の7章からなる。第1章は、日本の再軍備計画の中心人物として、終戦連絡局次長だった次郎と共に敗戦国の再建に尽力した元帝国陸軍の軍人辰巳栄一との出会いから、その後の思い出を綴っている。

第2章は、次郎誕生から、少年期、英国ケンブリッジ大学クレア・カレッジ留学での終生の友人となる7世ストラップフォード伯爵ロビン・ビングとの出会い、そして父文平の会社「白洲商店」



の倒産のため、帰国を余儀なくされるまでを綴っている。

第3章は、帰国した翌年、正子(樺山正子)と結婚し、英字新聞社、英国系貿易会社、日本水産などに務めるが、太平洋戦争勃発を前に、日本の敗戦とその後に起こる食糧不足を予測し、鶴川村(現在の東京都町田市)に移り住み、農業を営む傍ら、吉田茂のもと、所謂「ヨハンセングループ(吉田反戦グループ)」の一員として反戦活動を行うところまでを綴っている。

第4章は、戦中の出来事、敗戦後、吉田茂に請われて終戦連絡事務局参与、事務局次長を歴任し日本国憲法誕生に現場に立ち会ったところまでを綴っている。

第5章は、第2次吉田内閣政権下で、貿易庁長官就任、貿易庁を廃止して通商産業省(現在の経済産業省)設立を見届けて、政界を去り、東北電力会長に就任、サンフランシスコ講和条約締結の全権委員団に特使として同行、東北電力会長を退任後、ロンドンの証券会社の顧問に就任するまでのことを綴っている。

第6章は、東北電力会長退任後、大洋漁業(現マルハニチロ)や日本テレビの社外役員などを務める傍ら、「軽井沢ゴルフ倶楽部」の理事長として、その運営に情熱を傾けた頃のこと、財界を中心とした著名人から聴き取りした次郎とのエピソードなどを綴っている。

終章は、次郎最晩年から亡くなるまでのことである。80歳を過ぎてはなお、車への情熱は冷めず、トヨタニューソアラの開発のために、愛車ポルシェを提供した話や、亡くなった次郎の一周忌に、ニューソアラを心月院に横付けし、その完成を墓前に報告した話などを綴っている。そして、最後に生前の次郎を良く知る軽井沢ゴルフ倶楽部のキャディーやコーヒー売場の女店員への聞き取りなど、次郎の優しく、ユーモアに溢れた人物像を窺い知れる話で締めくくっている。

本書は、戦後日本の復興に誠心誠意尽くし、強者には強く、弱者には優しく、人間としての原理原則(プリンシプル)を貫き、風のように生きた白洲次郎の波乱に満ちた生涯をまとめた一冊であり、是非ご一読いただきたい一冊である。

アルカ通信 No.196

発行日 2020年1月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp